アメリカ合衆国ハワイ州における教育面での文化接触

―アメリカ人宣教師団の影響が大なる時代(1820－1839)―

田　中　圭治郎

ジェームズ・クックがハワイに偶然たどり着いて以来，様々な欧米人たちが，ハワイにやって来る。彼らは，ハワイに武器を始めとする西洋の文物，アルコール，病気をもたらし，その結果ハワイ文化は従来の純粋なポリネシア文化から，ヨーロッパ，アメリカの文化の影響を受け，徐々に変質し始めるのである。この影響が最も大きいのが，1820年にアメリカ，ニューイングランド地方からハワイ伝導にやって来たプロテスタント宣教師団からのものであった。

彼らは，文字を持たないハワイ人の言語をローマ字で表記し，聖書をハワイ語に翻訳することによって，ハワイ人をキリスト教化することに成功し，更にミッションスクールを作ることにより，単にキリスト教を教え込むだけでなく，ハワイ人にニューイングランド地方のプロテスタントの倫理をも身につけさせようと努力したのである。

すなわち，これ以前の時代においては，ハワイ人が欧米文化を自然に受け入れ，ハワイ文化の欧米化が徐々であったのに対し，この時代は，プロテスタント宣教師団によって，ハワイ文化（ポリネシア文化）が意図的に否定され，ハワイ人のアメリカ化が図ろうとした時期であった。

この時期の特徴は，政治・経済的にあまり力を持たない宣教師たちが，支配権力に癒着し，それと妥協しながらも宗教・教育を手段として，ハワイ文化をアメイカ化しようとしたことである。彼らは，学校を作るだけでなく，ハワイ人の学校教師を養成することにより，教育のアメリカ化を図る。まず最初にミッションスクール（教会付属の学校）を作り，ハワイの支配層，ないしハワイ人成人を教育し，次に宣教師団の支配の下に全ハワイ人の子弟のための「共学」学校を設立し，ハワイの初等教育をアメリカ式の学校に組織化するのに成功する。この時期は，ハワイ教育のアメリカ化の出発点として位置づけることが出来るであろう。

1節　外国からの影響による環境の変化

a．社会的・経済的変化

1819年カメハメハ1世はハワイ島カイルアで死去する。ハワイ諸島を武力ないし交渉で統一した彼ではあったが，必ずしもその支配は強固なものではなかった。各島の王，各地の族長はカメハメハ1世に従属しているが，彼らはその権力を依然として維持しており，カメハメハ

の死は彼らの権力拡張の機会であり，各地でハワイ王国からの独立を求める運動が広がってくる。カメハメハの妃たちの１人カアフマヌは，カメハメハの息子であり，かつ女族長ケオプオラニの息子リホリホを即位させカメハメハ２世とし，彼とハワイ王国を共同統治し，有力な族長カラニモクを首相に任命することによって，またカアフマヌ自身ハワイ王国に従属したカウアイ島の独立を恐れ，カウアイ王カウムアリイと結婚することによって，カメハメハ王朝の基礎を固めようとした。

当時ハワイ諸島には，アメリカ人，フランス人，ロシア人たちが寄港し，欧米の様々な文物をハワイに持ち込んでいたが，カメハメハ１世は，イギリスとの結び付きを強化し，彼らから入手した武器を使用して，ハワイ諸島を統一し，かつその支配を確固なものとしようとした。

外国人たちは，船乗り，軍人，貿易商人などが中心であったが，彼らの中にキリスト教宣教師が必ず含まれており，彼らのハワイ訪問の意図はハワイ開教であったことはいうまでもない。族長たちは，欧米の武器を手に入れるために，キリスト教にたいそう寛容であり，中にはキリスト教に改宗する者まで現れた。しかしながら，キリスト教による人生観と彼らが持っていたカプー制度とは，必ずしも合致するものではなく，彼らのキリスト教に対する見方は，外来の珍しい考え方に対する単なる好奇心の域を出るものではなく，真に彼らの中に根付くのはその後数十年を必要とした。

当時，ハワイ王国の収入の多くを占めていた白檀の木々は減少しつつあり，新たな資源の開発が求められた。太平洋の鯨を追って捕鯨船がハワイ近海を航行しはじめ，そのうちの幾隻かはハワイに寄港し，食料，燃料を求めるようになり，徐々にその数は増加し，以後30年の間，捕鯨業がハワイ経済を潤していく。

最初にハワイ捕鯨船が来航したのは1820年であったが，1820年から1830年の間に年平均60隻から80隻の捕鯨船がハワイを訪れている。これらの船に乗り込んでいる船乗りたちは，長い航海での疲れを癒すために，ハワイに上陸するや否やアルコールに浸り，またあらゆる快楽を求めて，ホノルル，ラハイナ，ヒロの町々をさまよい歩くのである。彼らの国籍は様々であったが，中でもアメリカ人が多く，特にニューイングランドからやってくる若者がかなりの数にのぼった[1)]。その理由として，当時成長が著しかったニューイングランド地方の商業の発達と関連しており，需要が多い鯨油を求めて人々がハワイに流入してくる。また，ニューイングランド地方からは様々な職種の商人たちがハワイにやって来，そこで商業活動を始めだした[2)]。

ハワイ王国の首都は，1812年ハワイ島コナ・カイルアに定められたが，カメハメハ１世の死去後，1919年カメハメハ２世によりマウイ島ラハイナに移された。ラハイナは，1845年カメハメハ３世により首都がホノルルに移されるまで，約25年間にわたってハワイ王国の中心として栄えた。（ホノルルが正式に首都として宣言されるのは，1850年であり，それまでの間は，２つの都市が首都としての役割を果たしていた。）

ラハイナに首都があったのは，当時，そこが捕鯨の基地として繁栄しており，ハワイ王室は

捕鯨の利潤で潤っていたためである。しかしながら，アメリカ本土での石油の発見のため，鯨油の需要が減少しつつあり，ラハイナの経済的立場はホノルルにとって代わられていく。オアフ島南部は，ホノルル港という天然の良港があり，太平洋貿易の中継点としての役割を果たしつつあったため，時代が下がるにつれて，多くの人々が集まり，富が集中していくのであった。

1823年カメハメハ2世と王妃カママルは，イギリスとの互恵防衛条約交渉のためヨーロッパを歴訪する。彼らの一行には，オアフ島知事ボキ夫妻，カメハメハ1世の娘キナウの夫ケクアナオア，カウアイ王カウムアリイの息子など当時のハワイの支配層の人々の多くが同行している[3]。彼らは，イギリス国内で，歓待を受け，イギリス国王との会見が設定されていたにもかかわらず，カメハメハ2世と王妃は直前に「はしか」にかかってしまい死去する。イギリスが彼らを歓迎するのは，太平洋上の軍事上重要な位置を占めるハワイ諸島を，フランス，アメリカ，ロシア，ドイツに支配されないように，ハワイ王国と友好的関係を保っておくことを意図していたからである。イギリス側は，2人の遺体を運ぶため，特使を派遣するといった最大限の敬意を払い，ハワイ王国との関係が密である状態を維持しようとした[4]。

カメハメハ2世は，ハワイを出発する時，後継者として弟カウイケアオウリを任命しており，かれが即位してカメハメハ3世と称した。彼は1824年から1854年までの30年間もの間ハワイを統治するのであるが，即位当時わずか10歳にしかすぎず，共同統治者カアフマヌが実質上ハワイを統治していた。彼女は誕生間も無いハワイ王国を欧米人の協力の下に，近代的な国家へと整備することに心血を注いだ。1832年彼女が死去した後は，カメハメハ3世の実質的な統治が始まるのであるが，彼は快楽を好み，次第に政治に関心を持たなくなってくる[5]。この状況を救ったのは，カアフマヌの後継者として共同統治者となったカメハメハ3世の姉エリザベータ・キナウ（カアフマヌ2世）である。ハワイ王国では国王と摂政との共同統治が慣習となりつつあり，キナウはカメハメハ3世の陰に隠れてはいるが，王国の運営に大きな役割を果たした。1939年キナウが死去し，カメハメハ3世は事実上単独のハワイの支配者となる。

この年，ハワイ初の「権利章典」（Bill of Rights）が出され，翌1840年「憲法」（Constitution）が制定され，従来の国王または摂政と彼らの評議会（Council —— 有力な族長により構成された国王の諮問機関）という政治組織が改革され，王族からなる上院と庶民よりなる下院という二院制議会が作られ，さらに最高裁判所の創設，ハワイ王国政府が直接小学校の経営に乗り出すといった様々な施策がなされ，ハワイが国家としての体裁を整えていくのである。

1820年から1839年の20年間，カアフマヌ，キナウの2人の摂政は，カメハメハが武断的な独裁で支配した王国を，様々な力関係のバランスを取りながら，その基礎を固め，国家としての体裁を整えていった時期である。

b．伝統的カプー制度の崩壊

カメハメハ1世が死去した時，カプー制は制度的に崩壊しかかっていた。すなわち，カプー制は伝統，慣習だけにとどまらず，身分制をも規定していたため，ハワイ諸島の統一者にとって，その支配の障害となりつつあった。また，欧米の文化流入とともに，様々な禁止項目（男性は女性と食事をしてはいけない等々）は人々が日常生活を送る上での不都合の事柄となっていく。カメハメハ2世（リホリホ）は，5，6ヶ月間，カメハメハ1世の喪が明けるのを待って，カプー制の廃止を宣言するとともに，ハワイ諸島の王，族長に対して，彼に忠誠を尽くすように求めた。このような動きは，共同統治者カアフマヌと彼の母親ケオプオラニの意向を反映したものであり，新しい王の下で，カメハメハ1世後の動揺を防ぐと同時に，新たな社会制度を求めたものであった。つまり，キリスト教の影響を受けた彼らは，従来の伝統的なものを否定し，新しい価値観を求めていたのである。

このような動きにたいして，カメハメハ1世の有力な部下でありリホリホの従兄弟ケクアオカラニは，ハワイ島コナでカプー制存続を求めて反乱を起こした。この頃，フランス軍艦ルラニ号がハワイを訪れていたが，船長ルイ・デフレシネは新しい王を援助したため，王の権力は強化された[6]。首相となったカラニモク族長は，1819年ルラニ号のローマカトリック宣教師の下でカトリックに改宗しており，またカメハメハ2世がヨーロッパを歴訪した時,彼に付き添ったのはフランス人顧問ジャン・リーブであったことからでもフランスはイギリスほどではないが，ハワイに影響力を持つようになってきていることが窺われる。

ケクアオカラニの反乱はかなり大規模なものであったが，彼自身フランス人の援助を受けたカメハメハ2世の軍隊に打ち負かされ，殺されてしまい，不成功に終わる。更に，同じ頃ハワイ島ハマクナ地区でも小規模な反乱があったが，支配階級の人々が自己の地位が脅かされるという事態に直面し，必死でそれに抵抗するのがわかる。

ハワイの支配層は，カプー制を否定する様々な努力をする。カメハメハ2世は，カアフマヌとケオプラニに説得されて，宴会で女性と一緒に食事をするという行動を取ることにより，カプー制を王自ら破ることを敢えてした。当時王はまだ若く，これらの行動を積極的に実行しようとしていなかったが，事実上の支配者である2人の女性に要求されて渋々せざるをえなかった。彼は，神々を恐れるあまり，多量の酒を飲むことによって気を紛らせた。しかし，結果は何も起こらず，これ以後，多くの神殿や偶像が破壊されていく[7]。

女性の族長であったカピオラニは，ハワイ島キラウエア火山の中でキリスト教の礼拝を敢えて行った。人々は，火山の神ペレの怒りに触れるとおののいたが，何事も起こらなかった。カピオラニは，更に石を火口に投げ込み，かつ女性が食べてはならないとされたオヘロの果実を食べてペレの神に挑戦をした。彼女の行為を見た人々は，キリスト教に関心を持ち始め，続々とキリスト教に帰依していく[8]。また，マウイ島の知事ケエアウモクは，父の宗教（カプー制崇拝）を軽蔑し，無神論者になっており，彼もキリスト教に対して寛容になっていく[9]。

古い世代の族長たちの反対にもかかわらず，当時20歳代，30歳代の新しい世代のカメハメハ一族を始めとする支配層は，欧米の文化の影響を強く受け，カプー制という古い社会形態でありかつ従来の伝統的な制度を否定し，欧米のキリスト教文化を受け入れていく。ここにポリネシア文化と欧米文化，特にアメリカ文化との混合，融合が生じてくる。

カプー制の廃止によりハワイ人たちの心の中で微妙な変化が起きる。庶民階級の人々は，従来の価値観を否定し，カプー制の束縛から自由になっていくが，それらに代替してくる，ポリネシア文化と欧米文化と融合した新しい価値観（生き方）がまだ出現してこないため，彼らは快楽的な生活に陥ってくる。生活習慣の乱れだけでなく，アルコールに浸り，更に性的な乱れを生じ，勤労意欲の減少など，ハワイ人にとって生きる意欲を失わせるような状況となったのである。

2節　アメリカ人宣教師団の影響

a．カルビン派の宣教師たちの到来

1818年ニューイングランド，コネティカット州から一団の青年男女がサディウス号に乗ってハワイを目指して出発した。彼らはカルビン派（組合派）の信仰を伝導するアメリカ海外伝導会のメンバーであり，ハワイへの組合派の伝導を目的としていた。彼らにハワイへの伝導を決意させたのは，ハワイ人留学生オボオキアに負うところが大であった。オボオキアの真剣に神に帰依し，ハワイの同胞への布教しようという熱意に打たれた人たちは宣教師団を結成した。ハイラム・ビンガム，アサ・サーストン（共に牧師），トーマス・ホールマン（化学者），サミュエル・ラグラス（教師），サミュエル・ウィットニー（機械工），エリサ・ルーミス（印刷工），ダニエル・チェンバレン（農夫）とチェンバレン以外はそれぞれの妻を，またチェンバレンは5人の子どもたちを含んだメンバーであった。更にトーマス・ホプ，ウィリアム・カヌイ，ジョン・ホノリの3人のハワイ人たちが，彼らの補助ないし通訳として同行した。

アメリカ海外伝導会は彼らに対して次のような指示を出していた。「あなたがたの見方は，低次の，狭い規模に限定されるべきでないし，またあなたがたの心を広く開けておくべきであり，あなたがたの目標を高く掲げておかなければならない。あなたがたは，島々を豊かな畑，快適な住居，学校，教会ですべて覆いつくし，総ての人々をキリスト教で啓蒙された国家にまで向上させ，何千，何万人もの現在または次の世代の人々に，永遠に祝福された館に住む手段を与える又は準備させることを目的としなければならない[10)]」

彼らのハワイ行きの目的は，単にハワイにキリスト教を伝導するためだけでなく，キリスト教に基づいた文明社会をハワイに建設することを意図したものであった。彼らは，オボオキアの宗教的情熱に啓発されて伝導の旅に出たけれども，彼らに同行した3人のハワイ人たちには単なる補助の役割しか与えていない。彼らの伝導のもう1つの目的は，ビルグリム・ファーザー

ズがメイフラワー号でアメリカに最初に到着した200年後を記念してハワイという新しい土地にキリスト教社会を作ることであった。それは宣教師たちの職業が，牧師はわずかであり，様々な職業を含むものであることからしてわかる。牧師は教会を，教師は学校を，印刷工は出版を，農夫は農業をといった，新しい社会の建設には必要な最低限の人材で構成されていた。

彼らは，翌年3月ハワイ島に着いたが，そこでカメハメハが前年の5月に既に死去していたのを知らされた。4月当時カメハメハ2世が喪に服していたハワイ島カイルアに投錨し，上陸許可をカメハメハ2世に求めた。彼はこの申し出の対応に苦慮した。というのは，これほど多くの外国人が一度に定住を希望したことは，今までかってなかったからである。また，彼自身カメハメハ1世が死去したカイルアから新しい土地ホノルルにその居住場所を移動させ，気分を新たにして王国支配をしようとしていた。宣教師団の代表者ビンガムは国王に謁見を申し出て彼らの上陸ならびに滞在許可を求めたが，カメハメハ2世は彼らに対してたいそう警戒的な態度を取り，1年間に限り滞在することを認め，それ以上の滞在の保証を与えなかった。

彼らの到着はたいそうタイミングがよかった。というのは，当時カプー制が否定され，それに代わる何かが求められており，キリスト教は，王族たちにとってたいそう新鮮なものであったからである。宣教師団の人々はすべて20歳代前半であり，伝導の熱意に満ち満ちており，彼らの情熱は次第に王族たちの心を捕らえていき，彼らの神の王国の話に耳を傾けるようになっていく。そのため，わずか1年間の滞在許可が永久的なものに変化していく。

サーストンとホールマンはハワイ島カイルアの海岸へ，ビンガム，ルーミス，チェンバレンはホノルルへ，ウィットニー，ラグレスはカウアイ島ワイメアへ上陸して教会を作り，それぞれの土地で足場を築いて行った。

「最初の宣教師団の人たちは，もっとも幸運な時期である1820年にハワイに到着した。カメハメハ1世が1年前に死去し，彼の息子リホリホ（カメハメハ2世）がカアフマヌと彼の母ケオプオラニの主張を取り入れ，カプー制を廃棄した」のであり，「宣教師たちが，すばやくハワイの宗教的・政治的空白の中に入ることが出来たのは，神の摂理の働きのように見える[11]」とスツーバーが述べているように，彼らがハワイに到着した時期がキリスト教伝導にとって丁度よいタイミングであった。

彼らの以前にも，ハワイを訪問した船舶には様々な宗派の宣教師も乗船しており，彼らからキリスト教も若干伝わっていたはずである。また，定着を決意して大規模な伝導を意図したカトリック宣教師団が，彼らよりも7年後に到着したため，伝導活動にたいそう不利益を蒙ったことからして，かれらのタイミングの良さは，彼らにとって「神の働き」といってよいかもしれないのである。

プロテスタント宣教師団は，この後1823年，1828年，1831年，1832年，1833年，1835年と1837年と計8次に亙っている。彼らはハワイに到着する度に，まだ未伝導地に教会を建て，そこに学校を併設していく。8次の宣教師団の到来により，ハワイ王国の津々浦々に組合派の

教会と学校が作られていくが，その背景にはカアフマヌを始め各地の族長の協力があったことは事実であろう。

b．宣教師団の伝導意図

彼らはハワイに到着した時のハワイ人観について述べてみる。

「話しをしているハワイ人たちの貧困さ，退廃さと野蛮さという外見や，頭の端から足の先まで真っ黒に日焼けした肌を裸同然に露出している彼らの外見は，ぞっとするものであった。われわれのうちの幾人かは，涙が溢れ出し，その光景から顔を背けた。もう少し神経の図太い他の者たちのみが，ハワイ人たちをじっと見続けることが出来た。しかしながら，彼らは『これが人間か，こんな者たちを文明に導くことが出来るのであろうか』と，覚悟をしてから叫んだ。」[12)]

彼らカルビン派の人たちにとって，ハワイ人たちの自然の中での生活は耐えられないものであった。彼らは布教の中で，自分たちの価値観をハワイ人たちに押し付けることにより，すなわち彼らをアメリカ化させることにより，ハワイ人たちを救済しようというごう慢な態度が色濃くにじみ出ている。

しかしながら，彼らの力は弱く，ハワイの地で開教するためには，ハワイの権力者層にいかに取り入るかが大きな課題となってくる。彼らはまず，1年の滞在許可期間にいかに自分たちの思想ないし文物が素晴らしいかを，ハワイの王族たちに訴えることが必要とされるのである。しかしながら，カアフマヌには，カルビン派の考えには余り関心がなかった。彼女の関心は，いかにハワイ諸島の統一を維持するかであり，宣教師たちに付き合っている暇はなかった。この状況が変化するのは，カアフマヌが重い風邪をひいた時，ビンガム夫人が献身的に看病し，そのために彼女の病気が良くなってからである。それ以後，カアフマヌは，アメリカ人宣教師たちに関心を持ち始め，彼らの考え方を聞く耳を持つようになる。

カアフマヌがキリスト教に関心を持ち，組合派に改宗するようになると，ハワイのアリイ階級の人たちはこぞって改宗していく。カアフマヌは一度改宗すると，熱烈なキリスト教徒となり，彼女とその後継者キナウは，宣教師団に色々な便宜を図るようになる。1827年カトリックの宣教師団がハワイにやって来た時，カアフマヌは，彼らの布教を禁止し，国外へと追放する。このような事態はキナウの時代になっても同様であり，彼女が1839年に死去した後に初めてカトリックの布教が許された。アメリカの宣教師は彼女たち共同統治者の庇護の下で急速にその勢力を拡大していくのである。

ハワイの支配階級の多くが組合派の信仰を持つに従い，宣教師たちは，ハワイ人たちに彼らの習慣，価値観を押し付けてくる。亜熱帯のハワイにもかかわらず，肌を見せるのを禁止し，「淫らな踊り」であるフラダンスは彼らによって否定されてしまう。熱心なキリスト教徒のハワイ人女性は，欧米の長いドレスで身を包みこむ。禁欲，禁酒などのきびしい倫理観に高い価

値が置かれ，ハワイの伝統文化が徐々に消滅するようになっていく。

1824年，カアフマヌと族長評議会（council）は，宣教師たちの助言を得て，宣教師たちの教育の方針に従い，学習に参加し，安息日を守り，神を敬い，そして神の教えに従い，人々を教化することの決定を宣言した[13]。このような決定は，宣教師団の伝導意図がわずか4年の間に実現したことを意味しており，つまりハワイでの伝導の成功を物語っている。

この時期は，プロテスタント宣教師たちが教会，ミッションスクールを，また支配階級の子どもたちには，特別学校を，また後にはプロテスタント主導型の「共通」学校を，それぞれ支配階級の人々と協力しながら作っていく。彼らの理念は，キリストの王国をハワイに設立することであるが，王族，族長という支配階級との妥協の中で，階級制を認めた上での複線型の学校制度を作っていく。その過程で彼ら自身徐々に特権階級化し，次第にその宗教的情熱が失われていく。

3節　教育における試行錯誤の時期（1820－1829）

a．アメリカ教育移植とハワイ化への動き（1820－1822）

最初のミッションスクールは，ビンガム夫人によってホノルルに設立された。これ以外に，教会が存在したハワイ島カイルア，カウアイ島ワイメアにも同じくミッションスクールが設立されていく。これは白人の夫とハワイ人の妻の間に生まれた子どもたちが教育の機会が与えられないために作られた学校である。この学校は設立当時1820年5月には10人であったが，9月には40人に増加している。この学校の生徒は，成人と子どもが半々であり，知事，彼の妻と娘といったハワイ人支配階級の人たちも含まれていた。カメハメハ2世を始めとする王族たちは，当初カイルアのミッションスクールで学んでいたが，後にはホノルルのミッションスクールで学ぶようになる[14]。

教科書はすべて英語であり，新訳聖書，ウエブスターの綴り方の本，アメリカンプリマーが使用されていた。この学校では完全にニューイングランドのやり方がなされ，特に試験方法はハワイ人の間では一般的となり，多くのミッションスクールのモデルとなる。学校の目的として，当時のミッション・レポートには，以下のように述べられている。「学校は，族長や民衆に対して，誠心誠意の気持ちを持たせ，生き生きさせるような生活を送らせることである。すなわち，彼らに自分たちが存在していることを新たに認識させ，そうすることによって，彼らが考え，行動できるようにする[15]」

宣教師たちは，王や族長に特別な教育を与え，それ以外の成人男女，子どもには機会があれば，教育を与えた。王族たちは，欧米への関心の強さから，さらに知識独占を意図し，アメリカ人からの英語教育を積極的に求めた。また，アメリカ人宣教師たちも，支配階級特に王族の協力なしでは布教活動が出来なかったため，王族ないし，その子弟の教育に力を入れた。

サーストンは，王族への教育について次のようなコメントをしている。「国王の命令は，王族，王が特別に許可を与えたもの，ないし白人の妻や子ども以外の者に教育がなされるべきでないということであった。5，6ヶ月の間，国王陛下が真っ先に学習を受けたが，聖書がもたらされる運命の盃は無視された[16]」。

これを見ると，王族たちは，「運命の盃」をうけるといったキリスト教への関心よりは，欧米文化吸収の欲求がたいそう強いことがわかる。そして教育上の言語，教材のすべてが英語であるが，これは支配階級の成人や子どもだけにとどまり，一般庶民にはのような教育機会は与えられていなかったことが分かる。

ハイラム・ビンガムを中心とするアメリカ宣教師団の人々は，王族ないしアリイ階級の人々だけでなく，一般庶民への布教にも大いに関心があった。彼らは，教会における布教活動だけでなく，教育活動にも力を入れた。それは聖書を読み書きすることの能力を高めることであり，宗教活動の一環として教育が考えられたからである。

ジャッドは，「族長たちの哀れむべき方針は，自分自身の権力を維持するという目的のために，すべての才能と威光を独占することである[17]」と述べ，支配階級の人たちが民衆の啓蒙をあまり望んでいないことを嘆いている。一般庶民に対する教育の不振は，支配階級の人々の無関心だけではなかった。初期の成人を中心とする学校にたいして，暴力的に拒否する人々がいた。それは，白檀の木を輸出する業者たちである。彼らは，山から白檀の木を切り出す労働者としての成人ハワイ人たちが，学校に通うことにより，自分たちの仕事に大きな障害がでたからである[18]。

彼らは庶民にも，伝導すべきキリスト教の中心となる聖書を英語で教えようとしたが，王族に対するのとは違って，仲々うまくいかなかった。そこで，庶民が日常的に話すハワイ語での布教を意図したが，ハワイ語には書き文字が存在せず，彼らがそれをローマ字化する必要に迫られていたが，彼らアメリカ人にとってハワイ語（カナカ語）は耳に入りにくく，ローマ字化は困難をきわめた。当初の2年間は彼らの伝導は失敗の連続であった。

1822年7月ロンドン伝導協会のダニエル・ティーアマンとジョージ・ベネットがハワイにやって来たが，それらのメンバーの中にウイリアム・エリスがいた。彼はタヒチ島で6年間伝導活動に携わっており，タヒチの言葉に堪能であった。彼はハワイ滞在2，3週間ですぐに，ハワイ語を習得することが出来た。ハワイ語はポリネシア語の一部分であるため，タヒチ語の堪能なエリスにとっては，ハワイ語の習得は容易であった。アメリカ人の宣教師団の人たちは，ハワイ語のローマ字化にエリスの助力を求めた。エリスの協力により，聖書ないし様々な教科書類が順次ハワイ語に翻訳され，教会や学校でハワイ語での教育が行われるようになっていく[19]。

しかしながら，エリスでも，カメハメハをタメハメハ（Tamehameha）と綴っている。それでもクックがマイハマイハ（Maihamaiha）と，またバンクーバーがタマアマア（Tamaamaah）と綴るより，はるかに発音に近い綴りとなっていることは事実であろう。

「英語においては，二重母音と呼ばれる2文字は，theeにおけるeeのように同じ発音を延ばすために，またpoolにおけるooのように1つの全体的な異なった発音をするのに使用される。しかし，ハワイ語においては，たびたび母音の発音の繰り返しである。[20]」と，彼はかなり詳しく英語とハワイ語との違いについて述べている。次に述べるのはエリスが記述したハワイ語の綴り方と実際の発音についてである。

場　所　名

エリスの綴り	(現在の綴り)	エリスの実際の発音記述
Ha-wai-i	(Hawaii)	Ha-wye-e
O-a-hu	(Oahu)	O-ah-hoo
Kau-ai	(kauai)	Tow-i or Tow-eye
Mau-i	(Maui)	Mow-e
Kai-ru-a	(Kailua)	Ky-roo-ah

人　名

エリスの綴り	(現在の綴り)	エリスの実際の発音記述
Ta-me-ha-me-ha	(Kamehameha)	Ta-me-hah-me-hah
Ri-ho-ri-ho	(Liholiho)	Ree-ho-ree-ho
Ka-a-hu-ma-nu	(Kaahumanu)	Ka-ah-hoo-ma-noo
Ku-a-ki-ni	(Kuakini)	Koo-ah-ke-ne [21]

これらの綴りをみると，ハワイ語をローマ字式の綴り方で表現し，それらをいかに英語式で発音するかが述べられている。ただ，ここでもKとHの違い，LとRの違いがはっきりしていないハワイ語自体にこれらの両方に聞こえる発音が存在するのであるが，ハワイ語は，当時の欧米人にとって聞き取りにくくかつローマ字化しにくい言語であったことはまちがいないことであったろう。「ただ，プロテスタント宣教師にとって，ハワイ人へのキリスト教布教には，彼ら自身のハワイ語習得が必須とされており，そのためにエリスの助力によってなされたハワイ語のローマ字化の果たした役割は大であったことはいうまでもない。

学校で使用される印刷教材は，短期間に充足されるようになる。1825年には，1万8千冊の読み書きの入門書，1万3千冊の教義問答集が生徒たちに配布された。5年後には，22冊の本が作られ，総計38万7千冊の本が印刷された。[22]

b．ハワイ語による教育とミッションスクールの隆盛（1823－1829）

ハワイ語による印刷物の出現とともに，ハワイ人の間に急速にアメリカ宣教師団の価値観が浸透してくる。1822年聖書が翻訳され，キリスト教が一般庶民に広まると同時に，ハワイ最初の新聞ラマ・ハワイ，クム・ハワイが刊行され，ハワイ人庶民階級の啓蒙に力が注がれるよ

うになる。また，学校では，ハワイ最初の教科書パラパラ及び綴り方の本が使用されるようになる。パラパラ（ハワイ語で手紙の意）は，道具や身の回りの物事の説明を加えることによって，生徒に読み書きの初歩が教えられた。各地の族長たちは，パラパラを学習することによって，短期間に文字を読み，わずかばかりの文字が書けるようになる。そこで，支配者たちは，すべての成人がピアパ（Pi-a-pa，ハワイ語のａｂｃ）を学習しなければならないという命令を出す[23]。

1824年ハワイ最初の法律（common low）が公布され，この法律の中で，総てのものがパラパラを学習せねばならぬことが規定されていた。この法律に対して反対する人々が多かったにもかかわらず，カアフマヌを中心とするハワイの支配層たちは，1825年，1827年にその学習を強化する法律を施行することによって，庶民教育の強化を図った。

当初の生徒のほとんどは成人であり，学校教育は，成人の読み書き能力を得させることを目的としていく。年とともに子どもが徐々に増加していくが，成人の生徒数をこえることはなかった。

ルーミスは，1823年12月31日次のようにのべている。

「おそらく，2000人近いハワイ人たちは今や読み，そしてかなりの程度書くことが出来る。そして同じ程度にお互いに通信が出来る。2，3の者は，算数の学習を始めたところである。それはハワイ人たちの学習への熱意のあらわれである[24]」

ハワイ人たち自身が文字を学ぶことにたいそう関心を持っていることが窺われる。彼らは文字という伝達手段の有用さを認識し，それの習得にたいそう関心を持っていた。これは支配層には特に強かった。カアフマヌは，ハワイに寄港しロシア人船長フォン・コッツブに次のようにのべている。

「これまでは —— 私の周りに存在する人たちとしか話を交わせなかった。今や，私の考えをそっとつぶやくだけで，どんなに遠くにいる人たちに対しても，自分の伝えたい相手にだけ伝えることが出来る[25]」とのべ，文字の重要さを認識している。これは，単なる知識だけでなく，支配の手段としての文字の重要性が認識されているのである。ハワイ王国の支配の基盤となる法律が作成され，文字がはたす役割は，かぎりなく増大していく。

文字学習はキリスト教宣教師団にとってはキリスト教の普及を，支配階級にとっては法律による支配強化を，というふうに両者の目的・意図は異なっていても，庶民に文字を学習させるという共通の目標を持っていたため，庶民のための学校教育は急速に普及していく。カアフマヌが宣教師団の宗教的教育プログラムをハワイ人たちに強制するのをためらわなかったのはこのためである[26]。

表1は，1820年から1830年の間のプロテスタント・ミッションスクールの学校数，教師数，生徒数を示している。

表1　プロテスタント・ミッションスクール

年	学校数	教師数	生徒数
1820	1	不祥	40
(オアフ島のみ)			
1821	1	不祥	30
(オアフ島のみ)			
1822	不祥	不祥	65
1824	不祥	50	1,600
1825	不祥	50	2,000-3,000
1826	不祥	不祥	20,000
1827	不祥	不祥	25,000
1828	不祥	500	34,395
1830	674	不祥	39,208

[27]

1824年から1827年の間にハワイ諸島の成人のほとんどすべてのものが学校へ行っていた。[28] しかしながら学校では，教師，教科書とスレートと鉛筆というふうに学校教育に必要なものがすべて不足していた。1826年の宣教師団の年次大会で次のようなことが述べられている。

「全諸島のすべての地区に学校が作られた。そして学校数と生徒数が急激に増加したので，われわれはそれらをすべて把握することが出来ない。―― われわれは学校数は25,000校と推定している。これらの教育のために少なくとも400人のハワイ人教師が雇用されている。―― おそらく他に100人以上の教師と自称しない人たちが，族長ないし地主たちによって，生徒の教育のために雇われている。[29]」

また教師の質についてこの大会では次のように述べられている。

「すべてハワイ人教師は，どの程度教えることが出来，資格を許可したり，仕事を割り当てる免許状を持つことが出来るかを宣教師から試験されるべきである。[30]」

教師の資格が宣教師たちによって認定を受けるという事実により，アメリカ宣教師団によるハワイ教育支配の一端を窺い知ることが出来る。

c．この時期の教育の特徴

ブリスケは，この時期の教育について次のように述べている。

「最初の20年間は，宣教師団によって援助された教育計画が発達した時期であった。ハワイ語は，文字に表され，教科書が印刷され，学校が建設され，ハワイ人教師が訓練され，そしてプロテスタントとカトリック宣教師団の援助の下で特別学校（special school，筆者注―― 特権階級のための学校）が作られた。[31]」

また，ウイストも，「1820年からほぼ1831年の一時期は，ハワイ語が書き文字に表され，教科書が印刷され，ハワイ成人の大部分が，読み書きの基礎を学習をした。1831年から1840年の間の時期は，再組織化と発展の時であるのだが，教育の対象が成人から子どもへと移行し，教師訓練が改善され，特別学校が作られたというのが，特徴となっている[32]」とのべており，ハワイ教育におけるプロテスタント宣教師団の影響は大であったことがわかる。

この時期は，1824年の教育法の成立により，教育制度，内容の充実が図られたことは事実であろう。

「その法律がたいそううまく効力を発揮したので，1831年までに5万人のハワイ人成人たちが，スリーアールズや簡単な教義問答を学習するために，1,000以上のハワイ人のための学校に通っていた。族長たちが援助していたのは明確な事実である[33]」とスツーバーが指摘しているように，法律のお陰で各地の族長やアリイ階級の援助・理解を得て，プロテスタント宣教師団によるミッションスクールは，ハワイ人たちに教育を与えていく。これは，ハワイ人たちをキリスト教化すると共に，アメリカの教科書を使用することによって，急速なアメリカ化をハワイ人たちに求めることになった。彼らは，外来の文化・思想を吸収する中で，精神的にもアメリカ化されていく。

4節　ミッションスクールの発展・衰退と「共通」学校の成立（1830－1839）

初期の時代において，教科書や教育実践は殆ど総て宗教的な性格を持っていた。宣教師団が印刷物を出版する最初の目的は，人々に利用出来る聖書と宗教書をつくることであった。少し時がたつと，ハワイ人教師と指導者たちの訓練のために，いくつかの学校では，単なる聖書の読み書き教育だけでなく，更にカリキュラムを充実させる必要が生じてくる。しかしながら，宣教師団は，いつまでも初等教育を独占しようという気持ちはなく，出来るだけ早く，その教育の仕事を政府に引き渡そうとした[34]，とカイケンドールが指摘しているように，宣教師団はミッションスクールを設立するだけでなく，新しいタイプの学校を摸索する。

ハワイ人のための教育として2つのタイプの学校が出現している。第1番目は，「共通」学校（common school）である。この学校は，宣教師から教育を受けたハワイ人教師たちによって教育されており，一般庶民の子どもたちが通っていた。それに対して第2番目のものは，特別学校であった。この学校は，宣教師が直接，教育をし，族長（アリイ）階級の子どもたちの中から選ばれたものが教育を受けていた[35]。

これら2つの学校では，教育の言語としてハワイ語が使用されており，教育内容な，カルビン派のキリスト教を中心とする道徳教育であった。これらを見ると，アメリカ人宣教師団の人々は，一般庶民の子どもたちと，族長階級の子どもとを，明確に選別していたことが窺われる。

カイケンドールは，ミッションスクールをも，「共通」学校（common school）と呼んでお

り，「共通」学校を広い意味でとらえている[36]。もちろん，彼がとらえているようにミッションスクールと「共通」学校は，重なり合う部分があるのは事実であろう。ミッション・ステーション（mission station）に置かれた学校は，時により，ミッションスクールないし「共通」学校になる。また，族長によって経営されている学校も，場合により両者のどちらかになる。そのためカイケンドールは，ミッションスクールも幅広く「共通」学校ととらえているが，ここでは，教会経営の学校ではなく，族長がイニシアティブを取っているかもしれないが，地域社会の中で，地域社会の人々によって維持されている学校を「共通」学校と呼ぶ。すなわち，プロテスタント宣教師団の影響下にはあるが，教育対象があくまでも庶民であるのが「共通」学校であるのに対して，ミッションスクールは，庶民だけでなく，支配階級，白人との混血児をも含む様々な階層の人々を生徒として受け入れていたからである。

a．ミッションスクールの発展と衰退

1830年まで急速に増加しつづけたミッションスクールは，この時期に入ると急激に減少する。表2は，1830年から1840年にかけてのミッションスクールの推移を示したものである。この表をみると，1831年までは増加の傾向を示している。1831年の生徒数44,895人が1838年になると，8,100から9,100人と5分の1に減少している。また，学校数も1831年の908校から，1839年の200校と4分の1以下に減少している。この減少がどの年から始まったかは，この表が不祥の部分が多いために不明であるが，1835年には既に減少しつつあったと推測される。これは，「共通」学校の出現・普及と関連していることは事実であろう。

ウイストは，ミッションスクールのピークを1832年と述べている。また，彼によるとハワイ人成人の40パーセントがミッションスクールに通学しており，それらの学校の生徒の大部分が成人によって占められていた。例えば，1829年には，オアフ島の生徒数のうち10分の9が成人であった[37]。

表2　プロテスタント・ミッションスクール

年	学校数	教師数	生徒数
1830	674	不祥	39,208
1831	908	900	44,895
1832	不祥	不祥	不祥
1833	不祥	不祥	不祥
1834	不祥	不祥	不祥
1838	不祥	不祥	8,100-9,100
1839	200	不祥	14,000
1840	不祥	不祥	15,000

[38]

b.「共通」学校の出現

プロテスタント宣教師団の人たちは，ミッションスクールを作ることにより，当初は成人を，後には子どもたちを教育することに骨を折ったが，彼らの目標は，ハワイにキリスト教の王国を確立することであり，総ての民衆の教化を意図していた。また，彼らの出身地ニューイングランド地方では，早くから公教育の思想が普及しており，アメリカの公教育はニューイングランド地方の教育を母体としているといわれており，彼らの教育制度をハワイに持ち込もうとした。そこで彼らの指導の下に，アメリカ式の公教育制度をハワイに導入することになる。

ミッションスクールが主として成人を被教育者とし，また教会付属の教育機関であったのに対して，「共通」学校は，各地域社会に1校公的な性格を持った学校を作ることであり，その地域社会に居住する子どもたちは，学校出席が義務づけられる。1830年代に数が増えだした「共通」学校は，「ミッションステーションの真近くではなくなり，むしろ各地に散在するようになる。それらは，ある時期または特定の場所では，かなり繁栄したが，他の場所や異なった時期においては，かなり衰退したり，消滅した[39]」。ミッションスクールが，教会という後ろ盾があったのに対して，庶民学校は各地域の状況により，繁栄したり，衰退したり千差万別であったことが窺われる。

この義務教育制度は，アメリカの影響を受けた，1824年の学校法に負うところが大であり，この法律により，庶民が学習すべきであるという考え方が一般化していく。「共通」学校は，1830年代になると，各地の族長たちの支持の下に隆盛を遂げるようになり，1834年には，王族や族長たちが，様々なミッションステーションに，恒常的な校舎建設のための用地を提供するのに同意している。1831年には，1,000校もの学校が存在し，5万人のハワイ人成人たちが通学していたが，教育内容は，スリーアールズと教義問答が中心であり，ミッションスクールとあまり大差がなかった[40]。

「共通」学校がミッションスクールと異なるのは，それらの学校が，主としてハワイ人自身の手で運営されていたことである[41]。ミッションスクールの教師がアメリカ人中心であるのに対して，「共通」学校の教師はラハイナルナ・セミナリーの卒業生であるハワイ人で占められている。E．D．ホールによれば，1835年「共通」学校の生徒数は1,847人であり，そのうち子どもはわずか610人にすぎなかった。学校の期間は，場所により7週間から48週間と異なっており，平均は30週間であった。そして，各週1日から5日とかなり幅がある[42]。

1830年代においては，ミッションスクールが衰退し，それに代わるものとして「共通」学校が出現してくるが，まだ近代公教育制度における共通学校ないし公立学校には程遠いものであった。この時期は，成人を対象とする学校から，子どもを対象とする学校への移行期であり，真に近代公教育が確立するのは1840年の学校法成立後まで待たねばならない。

c．教師養成制度の成立

ミッションスクールや「共通」学校は，初等教育機関であり，より上の段階の教育，すなわち中等教育の必要性が認識されてくる。1831年，アメリカ海外伝導協会は，教育において，ハワイ人による自立を目指すことを決定した。ラハイナルナ・セミナリーがマウイ島ラハイナに設立される。ラハイナは，ハワイ王国の首都であり，ウイリアム・リチャードとロリン・アンドリュースの2人がこの地区に教会を持って伝導活動をしていた所であった。この学校は，1831年9月にアンドリュースによって設立され，当初，教師は彼1人であり，生徒数は25人，学年の終わりには67人に増加していく。

ラハイナルナ・セミナリー設立の目的は，教師養成だけではなかった。目的の第1番目は，市民的，学問的，宗教的に神の祝福を受けた信念を永続させる偉大な仕事において，宣教師たちを助けることである。第2番目は，全般的な文学や科学を包括する健全な知識を，また大衆を無知と堕落から引き上げ，彼らを思慮深い，啓蒙された，そして道徳的な人々にさせる健全な知識を総ての島々に広めることである。そして，第3番目に教師養成が意図される。ラハイナルナ・セミナリーは，従来各ミッションで別個に行われていたハワイ人青年指導者養成を，一つにまとめて，かつより程度の高い教育内容を志向して設立されたものといえよう[43]。

1832－1833年の学校年では，ラハイナルナ・セミナリーには，63人の生徒が登録され，カリキュラムは，算数と書き方に，地理が加えられている。しかし，1833年になると，一般の中等教育機関に教師養成機関の性格が加味され，そして，1853年までに，内容的に中等教育レベルの教育内容を教授するようになった。

1836年には，大きな変化が生じてくる。まず最初は，生徒を選抜して入学させることであり，2番目は寄宿学校になったことであり，3番目はアメリカ宣教師団から5,000ドルの直接援助がなされ，4番目は生徒のために教会が作られたことである[44]。

更に，1836年，宣教師団の援助だけでなく，ハワイの民間会社が，学校債を発行したため，財政的に潤っていくのである[45]。

1837－1838年の学校年には，この学校は，内実共に，アメリカ本土のハイスクールレベルの学校へと高められていく。学校設立後11年間の卒業生158人のうち，105人は教師になり，35人は政府職員，5人は私企業に勤め，残り11人は無職であった[46]。これらの数字をみると，ラハイナルナ・セミナリーは，ハワイ人のエリート養成機関であることがわかる。アンドリュースは，他のアメリカ人教師や宣教師たちが，ハワイから帰国後も，ながくこの学校に勤務し，ハワイ人青少年をプロテスタントの理念で教育していく。

「1840年までに，ラハイナルナ（セミナリー）はその本来の目的を正当化するようになる。すなわち，その卒業生が共通学校の教師として島々に散っていったということである。初期の宣教師たちに訓練された教師よりも，より良く教育されているため，彼らはハワイ人たちの生活において，真の力となり始めた[47]」のであり，ラハイナルナ・セミナリーの卒業生たちが，ハ

ワイ人たちの次の世代の指導者として浮かびあがってくる。

ラハイナルナ・セミナリー建設後，アンドリュースの友人デビット・ライマンは，1835年，このようなレベルの高い学校をもう1校設立しようとしたが，宣教師団の同意が得られず，計画は挫折する。しかし，アンドリュースの助力もあり，500ドルを始め，多くの援助を宣教師団から受けるようになり，1846年10月ヒロ・ボーディングスクールの設立が可能となる。この学校は，当初，8人の寄宿生しか存在しなかったが，すぐにその数は12人に増加している。この年，ラハイナルナ・セミナリーも寄宿学校に変わっており，マウイ島ワイルクの女子のボーディングスクールと並んで，3つのボーディングスクールがハワイに存在することとなるが，これらの学校がハワイ人のための，当時としては，最高の教育機関となる。

ヒロ・ボーディングスクールは，1839年までに28人の男子学生が登録している。この学校は，「共通」学校を修了した生徒に対して，基礎的学習（読み，書き，算術）を与えているところであり，卒業生は，もし，より高度な学習を望むならば，ラハイナルナ・セミナリーに進学することが出来る。1840年以前のヒロ・ボーディングスクールは，生徒数は少なく，ラハイナルナ・セミナリーと連携をとりながら，ハワイ人男子青少年の教育を行っていくが，この学校は隆盛になっていくのは，1850年に入るのを待たねばならない。[48)]

1840年以後，デビット・マロを始めとする卒業生たちが，ハワイの教育界で活躍していくのであるが，1840年以前のこの時期においては，アメリカ人宣教師団が，生徒のうち，優秀なものを次の時代の指導者として養成しようとした時代である。特に，教師養成に力が入れられたのは，「共通」学校の教師を養成することが，ハワイの「近代化」を意味していたためである。「近代化」は，ヨーロッパ化，アメリカ化そのものであり，ポリネシア文化を否定し，欧米の文化をハワイ人に押し付ける以外の何ものでもなかった。

d．特別学校

特別学校（Special School）は，一般庶民の子どもたちの学校とは異なり，支配階級の子どもたちの教育機関である。前述のラハイナルナ・セミナリーなどの寄宿学校は，将来のハワイ人支配階級を養成するという意味で，特別学校のカテゴリーに入る。ここでは，それ以外に，王族ないし族長の子どもを教育する王立学校（Royal School），アメリカ人宣教師団の子どもを教育するプナホウ・スクール（Punahou School）について述べてみる。

王立学校は，当初「族長の子どもたちのための学校」とよばれていた。「1939年，高い地位の族長たちの子どもを教育するため，ホノルルに1つの学校が開校した。建物と財政的維持は，族長たちによってなされた。族長たちの要求によって，宣教師団から任命されたクーケ夫妻がその学校の教育に当たった。若い族長たちの学校（後に王立学校と呼ばれた）は，国の歴史の中でたいそう重要なものであった」[49)]とカイケンドールが指摘しているように，ハワイ人による国家運営を意図しており，当時の支配層の人々は，従来，白人にまかせてきた仕事を自分たち

で行おうと思い始め，より高度な教育を与える教育機関を求めだした。

ここで教育を受けたのは，カメハメハ4世，5世，カラカウア王，リリウオカラニ女王など，後にハワイ王国の国王，女王になるものも含まれており，ハワイ人の最高階級の者を英語で教育し，この学校修了後，アメリカ，イギリスへと留学ないし視察に送り出すのが常であった。

1839年に設立されたということは，この時期になって初めて，ミッションスクール，「共通」学校，ラハイナルナ・セミナリー，ヒロ・ボーディング・スクールとは切り離された，支配層のための教育機関が出現したことが特徴的である。

次に，白人の宣教師の子どもたちのための教育機関プナホウ・スクールについて述べてみる。この学校は，1831年，宣教師リューベン・ティンカーによって作られた。アメリカ本土で高等教育を受けさせる宣教師の子どもたちに，アメリカと同じレベルの，同じ教育内容の教育を与えることを目的としていた。[50)]

従来，彼らの子どもたちが教育を受けていたミッションスクールが，ハワイ人成人，子どもたちの増加とともに，その性格を異にしてきたため，ハワイ人とは全く別の学校を設立する必要性を感じてきたためであった。ミッションスクールが，ハワイ人のための「共通」学校，支配階級のための王立学校，白人のためのプナホウ・スクールとに分化してくる。「共通」学校の成立とともに，ハワイにおける公教育制度成立の萌芽が存在する反面，階級制学校制度が確立されていくことは，たいそう皮肉なことであろう。

e．この時期の教育の特徴

ミッションスクールと「共通」学校とは，その存在場所は異なり，教育対象も成人，子ども，ハワイ人だけ，ハワイ人と白人との混血と様々であったが，どちらもプロテスタントを中心とした宗派学校には間違いはなかった。ラハイナルナ・セミナリー，ヒロ・ボーディングスクールなどの中等教育機関，すなわちハワイ人エリート養成機関も例外ではなかったが，それらが単なるミッションスクール，「共通」学校，中等教育機関に終わらず，近代初等教育，中等教育，高等教育へと発展していったことは，歴史的に大いに意味のあることである。

つまり，次の時代においては，「共通」学校が宗派学校でなくなるからである。1840年代になると，カトリック宣教師団が再びハワイに上陸することが認められ，後にはモルモン宣教師団が到来し，「共通」学校が無宗派になっていく。そういった意味で，「共通」学校は，ハワイの公教育の出発点といえるであろう。

この時期の教育は，プロテスタント宣教師団が，ハワイ人に対して啓蒙活動を始め，従来イギリス寄りであったハワイ王室を，親アメリカ的にさせ，さらにハワイの教育を完全にその支配下に置くことに成功した時期である。しかし，ミッションスクールという教化活動に終わらず，各地の族長のバックアップの下に，「共通」学校を設立，更にその教師養成機関として，ラハイナルナ・セミナリーを設立したことは大いに評価してよいであろう。

ハワイ人たちは，支配階級から始まり，庶民階級に至るまでキリスト教に改宗することにより，アメリカ特にニューイングランド地方のプロテスタントの倫理観をごく自然に，また時としては半ば強制的に身に着けていくようになる。これらの現象は，表面的にはポリネシア文化とアメリカ文化との融合の始まりとして捕らえられることが出来るが，別の視点からみると，当時人々の心を支配していたポリネシア文化が，キリスト教の流入，受け入れの結果，その本来持っていた価値観を徐々に消滅させられつつある時期ととらえることも出来よう。

ただ，ハイラム・ビンガムに代表される宣教師たちのような厳格なキリスト教徒にとって，ハワイの現状は満足出来るものではなかった。彼らは，黒いコートを着，山高帽をかぶり，禁欲的な生活を送っており，それをハワイ人に強制したが，結果はあまり芳しくなかった。ビンガム自身，1839年ホノルルを離れ，アメリカへ帰国し，死ぬまでハワイの土を踏むことはなかった。それは，1840年代に入ると，プロテスタント宣教師たちにとって，ハワイが必ずしも快適ではなかったことを意味している。

「ハワイ王国は，確かにキリスト教国ではあるが，他のキリスト教国とは全く同じはでない」のであり，「彼ら自身（宣教師たち）の立場に立てば，伝導は失敗した」のであった。ハワイ人たちにとっては，「初期の時代には，彼らはハワイ諸島での単なる外国人にすぎなかったのである[51]」。

別の観点に立てば，ハワイ文化が，アメリカ文化との単なる接触に止どまらず，衝突，葛藤への道を歩むことを意味しており，ハワイ文化が，接触の過程で，文化変容をとげながらも，その独自性を維持し続けたということでもあろう。

注

1） 小説『白鯨』は，当時のハワイの捕鯨業を描写したものである。作者メルヴィル（Herman Melville）自身ラハイナに滞在し，船乗りたちの行動をつぶさに観察して，隆盛をきわめた捕鯨業の様子について述べている。ニューヨーク市生まれの彼は，1841年太平洋諸島を航海する船乗りとなり，タヒチ島を始めポリネシアの島々を訪れている。ハワイでは捕鯨業に携わったり，港町で様々な仕事に従事していた。A. Grove Day, Whaleman from New York: Herman Melvil', "Mad About Islands", Mutual Publishing of Hawaii, 1987, p. 58-81.

2） Edward Joesting, "Hawaii, An Uncommon History", W. W. Norton and Company, 1972, p. 91-92

3） Laura Fish Judd, 'Leaves From A Missionary's Diary', A. G.rove Day and Carl Stoven edited, "A Hawaiian Reader", 1984, Mutual Publising, p. 63.

4） 当時，ロシア帝国はアラスカを領有し，カリフォルニア，太平洋に領土的野心を抱いていた。1816年，ロシア人船長ルーリックは，カメハメハ1世と会い，ロシアとハワイとの関係を築き，1823年にはロシア人コッツブもハワイを訪れ，支配階級との関係を深めている。A. Grove Day and Carl Stroven edited, "The Spell of Hawaii", Mutual Publising of Honolulu, 1968, p. 104.

イギリスも，同じように領土的野心があったが，当時オーストラリア，南太平洋の経営に忙しく，またヨーロッパではナポレオンとの戦いに手を取られ，ハワイまで手は回らなかった。

1794年，バンクーバー船長は，ハワイ諸島でイギリスの国旗を掲揚したことを本国に報告したが，国王ジョージ3世はこの行為を拒否したのをみてもわかる。その後，カメハメハ1世が，ハワイのイギリスへの帰属を申し入れたのも，再び拒否されている。N. N. Bolkhovitinov, 'The Adventures of Doctor Schaeffer in Hawaii, 1815-1819', "The Hawaiian Journal of History", Vol. 7, 1973, p. 57.

5） 禁欲的なプロテスタント宣教師たちにとって，カメハメハ3世の快楽的な行為は耐え難いものであった。彼は，アルコール，賭博，競馬に熱中して，宗教的な行事に全く関心を示さなかった。

6） Ralph S. Kuykendall and A. Grove Day, "Hawaii: A History from Polynesian Kingdom to American Statehood", Prentice-Hall, 1976, p. 40.

7） Ibid., p. 41.

8） Ronn Rock edited, "Hawaii", Apa Productions, 1986 , p. 37.

9） Benjamin O. Wist, "A Century of Public Education in Hawaii", The Hawaii Educational Review, 1940, p. 14.

10） Philip Richard Brieske, "A Study of the Development of Public Elementary and Secondary Education in the Territory of Hawaii", (unpublished doctorial thesis), p. 25-26.

11） Stuber, Ibid., p. 21.

12） Ronn Rock, Ibid., p. 36.

13） Stueber, "Hwaii", p. 47.

14） ミッションスクールは，ステーションスクール（Station school）とも呼ばれていた。ハワイ諸島各地に教会が建てられ，それらの教会に学校が付設されるのであるが，それらの教会の位置をStationと呼び，それらの学校をステーションスクールと呼ぶ。また，生徒のうち成人が大きな割合を占める時期においては，それらはアダルトスクール（adult school）とも呼ばれていた。ここでは，それらの学校をミッションスクールに統一した。

15） Ralph K. Stueber, "Hawaii: A Case Study in Development Education 1778-1960", (unprinted doctorial thesis), 1964, p. 48.

16） Brieske, Ibid., p. 29.

17） Stueber, Ibid., p. 46.

18） Ibid., p. 48.

19） A. G. Day and C. Stroven, Ibid., p. 129.

20） William Ellis, "Journal of William Ellis", Charles E. Tuttle Co., 1979, p. 25.

21） Ibid., p. 27.

22） Stuber, "Hawaii", p. 47.

23） Wist, Ibid., p. 22.

24） Stueber, "Hawaii", p. 30.

25） Ronn Rock, Ibid., p. 37.

26） Brieske, Ibid., p. 31.

27） Robert C. Schmitt, "Historical Statistics of Hwaii", p. 211.

28） Briske, Ibid., p. 31.

29） Ibid., p. 31-32.

30） Ibid., p. 32.

31） Briske, Ibid., p. 27.

32） Benjamin O. Wist, "A Century of Public Education in Hawaii", Honolulu Star-Bulletin, p. 19.

33) Ralph K. Stueber, 'An Informal History of Schooling in Hawaii', "To Teach the Children", p. 20.
34) Ralph S. Kuykendall, "The Hawaiian Kingdom 1 1778-1854", The University Press of Hawaii, 1980, p. 102.
35) Stueber, Ibid., p. 21.
36) Kuykendall, Ibid., p. 109.
37) Wist, Ibid., p. 23.
38) Schmitt, Ibid., p. 211.
39) Kuykendall, Ibid., p. 109-110.
40) Ralph K. Stueber, 'An Informal History of Schooling in Hwaii', "To Teach the Children", Berinice P. Bishop Museum, 1982, p. 20.
41) Wist, Ibid., p. 31.
42) Ibid., p. 31.
43) Wist, Ibid., p. 87-89.
44) Wist, Ibid., p. 91.
45) Peter Morse, 'The Lahainalura Money Forgeries', "The Hawaiian Journal of History", Vol. 2, 1968, p. 95-96.
46) Ibid., p. 91.
47) Ibid., p. 31.
48) Ralph Canevali, 'Hilo Boarding School: Hawaii's Experiments in Vocational Education', "The Hawaiian Journal of History", Vol. 11, 1977, p. 77.
49) Kuykendall, "The Hawaiian Kingdom 1778-1854", p. 113.
50) Wist, Ibid., p. 102.
51) Gavan Daws, "Shoal of Time: A HIsutory of the Hawaian Islands", University of Hawaii Press, 1982, p. 105.